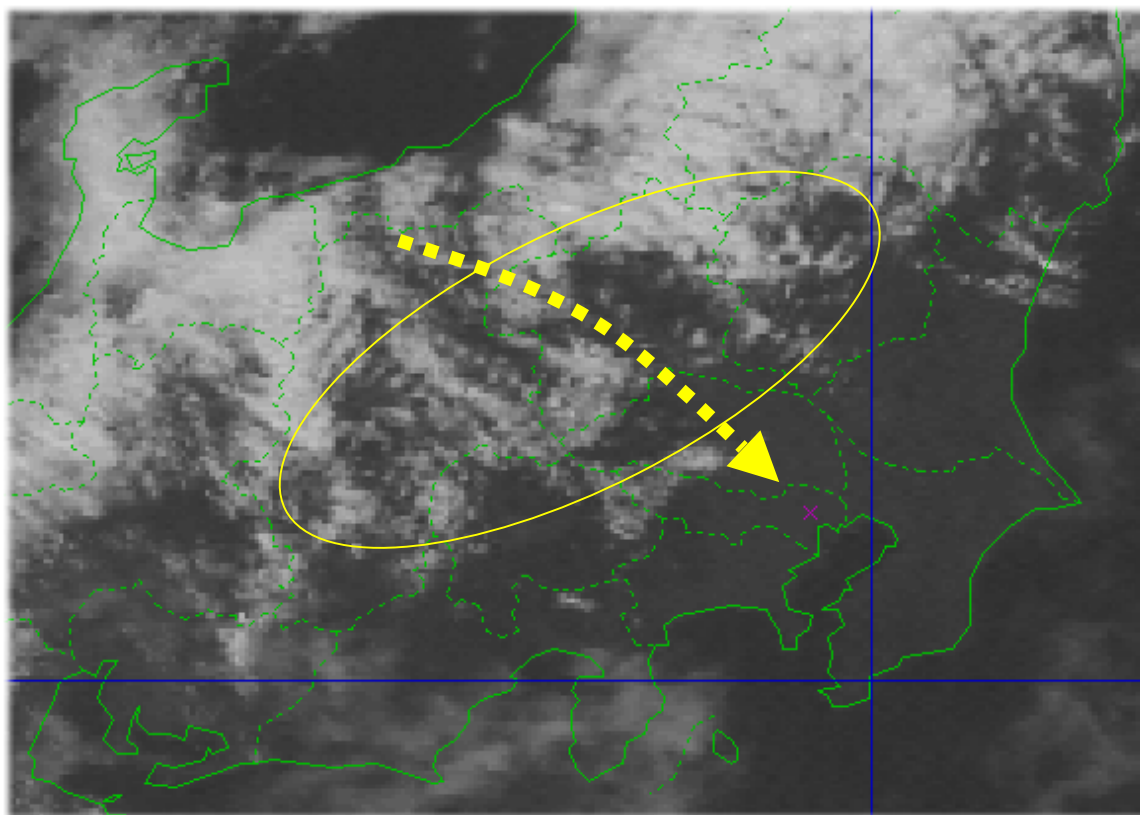


今月の気象衛星画像 (2004年7月)



2004年7月20日午後1時の可視画像

記録的な猛暑とフェーン現象

2004年7月20日午後0時58分、東京大手町では39.5℃を観測し、1923年の統計開始以来の最高気温を記録した。この日、関東近郊では35℃を越えた所が多く、東京都内では猛暑のため48人が熱中症などで病院に搬送された。

写真は、午後1時の可視画像である。中部山岳や越後山脈の北西側には、山岳によって堰き止められた下層の雲が見られ、弱い雨が降っている。一方、山岳の南東側には山脈に平行な走行をもつ等間隔に並んだ雲の列が見られる(図中囲み領域)。これは、「波状雲」と呼ばれ、山越え気流に伴って発生する。

午前9時の地上天気図によると、日本の南海上に太平洋高気圧があって、西日本に張り出している。雲画像にみられる「波状雲」は、高気圧の縁辺を回った暖かく湿った気流が、日本海側から中部山岳や越後山脈を越えて、関東平野に吹いていることを示唆している(図中矢印)。山岳を挟んで風上側では降水があり、風下側では昇温して湿度が下がり(東京の最小湿度は26%)晴天となっていることから、「フェーン現象」が発生したと考えられる。

関東近郊の記録的な猛暑は、太平洋高気圧におおわれて高温の日が続いていた上に、当日はこの「フェーン現象」も加わったためと思われる。翌21日も、甲府で40.4℃(歴代1位)、東京でも38.1℃(歴代2位タイ)を記録するなど、連日の酷暑であった。

(気象衛星センター)